

「このことを信じますか」

川原信夫

葬儀の準備には待たなしと言う面があります。何故ならば順風満帆の人生に突然悲劇が私たちを襲う事があるからです。先日の場合もそのようなでした。48歳と言う、働き盛りのご主人を突然、心筋梗塞で失われた方からの葬儀の依頼がありました。本来は英語部の成沢先生にとの依頼だったのでしようが、先生の都合で急遽私が司式をする事になりました。月曜日に初めてご遺族、ご親族、友人関係者の方々とお会いして、その三日後に葬儀と言う運びでした。奥様にとっても余りにも突然の事でしたので心の準備が出来ていなくて、戸惑いで一杯のご様子でしたが、それでもしっかりとお話しをして下さって準備をする事が出来ました。お聞きすると私たちの教会で16年前に成沢先生の司式の下に結婚式を挙げられたので、思い出の場所であるここで告別式をしたいと言うたっの願いでした。私たちの手狭な会堂では、予想される会葬者を収容し切れない事は明らかで、棺を出入棺する事もやっとの事だろうと思われましたが、何とかご遺族の意向に応えたいと葬儀社の方と相談をしながら精一杯整えました。また、ご親族や友人、会社関係の方々が懸命に手分けをして準備と奉仕にあたり、告別式当日の日を迎えました。

公の告知はされませんでした。それでも会社関係、友人関係の連絡を受けて多くの方が会葬に来られ、予想通り会堂の中でも立って頂き、会堂の外にも沢山の方が立って頂く事となりました。会葬者の多くが信仰をお持ちの方ではなかったでしょうし、また亡くなったご本人も信仰をお持ちではなかった方です。しかし、キリストの愛はすべての者の上に注がれ、神の恵みを受けるようにと、この突然の悲劇としか思えない機会をも用いて下さる事を願い、慰めの言葉を語りました。ただ、故人がイエス・キリストを信じて亡くなってはいないだけに、確かに天国に凱旋されたと宣言出来ないもどかしさが私の心を一杯にしました。そのような中で救いであったのは、奥様が自らを「クリスチャンです」とその信仰を明らかにされていた事でした。故に、奥様に対しては、悲しみと嘆きの現実の中で「神を愛する者、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益として下さることを、私たちは知っています。」と宣言する事が出来ました。また、「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。…死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高さも、深さも、そのほかどんな被造物も、私たちの主イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」と語る事が出来ました。

聖書は私たち人間は土地のちりによって造られ、やがてはちりに帰って行く存在だと言い、「…ただ、息に似て、その日々は過ぎ去る影のようだ。」と言います。また、そのいのちは「…しばらくの間現れて、消えてしまう霧にすぎない。…」とも言います。しかし、同時にその中に神は尊いいのちを与えていると宣言しています。そして、何よりも主イエス・キリストを信じる者には永遠のいのちを与える事を約束しています。「イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。』」(ヨハネ伝11:25-26)